裏路地探険

「春よ来い」と待ちわびた古の山陰道を歩く／新温泉町春来（はるき）

山陰道として人々が行き交った「春来峠」 てっぺんに立つと、そこは息をのむ山並み のどかな風景が広がる天空の里を往く

『牛の背に 我も乗せずや 草刈女
　春来三里は あふ人もなし』

これは新温泉町生まれの歌人、前田純孝が残した短歌。明治36年、東京からの帰省途中に春来峠の険しさを詠んだ歌である。

春来峠は香美町の村岡から湯村温泉、鳥取へと続く標高400メートルの峠で、古代より山陰道の難所として知られてきた。

つづら折りの坂道が続き、峠を越すには歩くしか方法はなく、冬は3メートルも雪が積もることがあり、旅人泣かせの峠であった。

そのてっぺんにあるのが春来地区。椿原を切り開いて村を作ったといわれ、かつては「椿村」と呼ばれていた。厳しい冬を耐えて、「春よ早く来い」と村人が待ちわびたことから、「椿」が「春来（木）」と転じて、地名になったとされる。

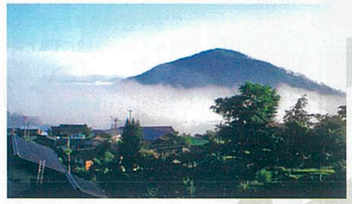
金龍山 萬福寺は高野山真言宗の古刹で、創建は平安時代末期とされる。龍の絵画で知られるたつの市出身の画家・出口龍憲画伯の墨絵数十点を所蔵。春来に縁があり、毎年、春来小学校の卒業生には龍の絵を寄贈していた。

寺前の大イチョウの下には、山陰道筋にあった六体地蔵を安置。

地域活性化の取り組みとして平成11年にオープンした「そば処 春来てっぺん」。春来は清水が湧き出る場所であり、その味は抜群。地元の生産組合がそばを育て、自慢の十割そばを提供している。毎年11月上旬(今年は11/8)には新そばまつりを開催。10～16時、水曜定休。そば打ち体験も可能(要予約)。

古来の山陰道とされる趣のある通り。春来峠は山陰道随一の難所であり、急坂の次にまた急坂に出くわして旅人が驚いた「二度びっくり」という地名が残る。

今から1338年前の飛鳥時代創建と伝わる古社。延喜式に記される由緒正しき神社で、江戸時代に「五社大明神」と称し、明治に入り「春来神社」と改められた。鳥居の脇には「みたらしの水」と呼ばれる清水が湧き出ている。



尾根筋を通って行ける城ヶ山は砦跡で、本丸跡、曲輪、堀切、土塁などがある。山頂下の広場には地蔵尊と昇天像が祀られている。昇天像は子授け、縁結びの神様としてご利益があり、お礼参りに訪れる人も多い。中腹の音寺山(おっとじさん)は約80メートルもある大岩で、江戸中期に唄われた名山節の歌詞に登場する。

「溜まり水と呼ばれる場所からは約7千年前の縄文土器に加え、弥生時代の石器も見つかっています。春来は古代から人が住んでいた、歴史の古い村なんですよ」とは、村の長老である田中董さん。

律令時代に山陰道が整備されると、人々の往来する街道筋として栄えた。馬を休ませる「馬場」や、「番茶屋」「元庄屋」などの屋号は、現在も使われている。

昭和初期に国道9号として峠道は大改修され、車が通る幹線道路として賑わった。昭和の戦後は7百人近い人が住んでおり、1日6千台もの交通量があったという。

集落の北側を望むと、山々の峰が連なり、その見晴らしのよさに感激する。春来は間道の要といえる場所で、東西南北の集落に通じる間道が各尾根筋に走っている。一見すれば孤立しているように思えるが、他の集落からの出入りが多く、交流も盛んだった。

「秋には雲海も見えるんですよ」とは、案内役の一人である田中彰副区長。家の窓からはまるで一幅の絵のような雄大な景色が広がり、朝起きて眺めるのが日課だという。

稜線がひと際美しい標高562メートルの「城ヶ山」は、村の象徴的な存在。鎌倉末期から南北朝期の築城とされる砦跡で、「子授かりの聖天さん」と呼ばれる昇天像が祀られている。そのご利益は確かなもので、村は子宝に恵まれているそうだ。

昭和50年に春来トンネルが開通し峠が県道に変わると、村は静かな山里となり、人口も減っていった。

そんな村の危機を救おうと、平成11年にオープンしたのが、村おこしの拠点となる「そば処 春来てっぺん」。地元産のそばを原料に、つなぎを使わない十割そばは、遠方からのファンも多い。すだれのように吊るされる「かき餅作り」も、今や但馬の冬の風物詩として定着した。

昔からの山陰道の面影を残す歴史の通り道、春来地区。そこには古代より人々が生きてきた証が感じられる。

●「T2裏路地探険」参加募集！

平成27年10月17日(土)
10:00～12:00
「池田草庵ゆかりの立誠舎周辺を歩く」
養父市八鹿町八鹿

＊上記実施日の10日前までに、18ページに掲載の但馬の情報誌「T 2」編集部まで、住所・氏名・年齢・電話番号・「T2裏路地参加希望」とお書きの上、ハガキで申し込みください。開催当日は午前中、現地集合・現地解散となります。申込締切後、参加ご希望の方へ郵送にて案内を送付します。

但馬の情報誌T2 Vol.96／2015年10月発行より抜粋